

月光キネマ

椿 あやか

へうろろ胡乱な舟が来る

月光キネマをひっさげて

その妖しきギヤマンの

邪光じやこうランタン輝けば

見える。視えるよ。そのココロ。

奥の暗闇そのまた底の

夢も現うつつも真実しんじつも。

僕の村では子供がたまに消える。

だから大人達は僕に言っつて聴かせるんだ。

満月の夜は晴れていても窓もドアもしっかり閉じて。

早く寝ないとアイツが来るよ。

攫さらいに来るよ。

「こわいよ。こわいよ。父さん母さん、村にソイツを入れないで」

それは無理さ。だつてアイツは海から来るんだもの。

ゆらゆらと胡乱な舟に乗って。

そうして言っつて聴かされて、僕は知っていたはずなんだ。

なのにどうしてなんだろう。

ある満月の晩、楽しい歌と音楽が流れてきて、気が付いたら海辺に居たんだ。

「寄っつてらっしやい。見ていらっしやい。月光キネマの始まりだよ」

月明かりのした、白い燕尾服の道化めいた男が砂浜で歌うように呼び込みをしている。

その首元の蝶ネクタイは銀色で星のようにキラキラと瞬瞬いていた。

海辺には僕と男しか居ない。

「坊や、いらっしやい。いらっしやい。月光キネマの始まりだよ」

陽気におどける男の後ろには、小さな舟

が一艘とめてある。

舟の上には大きなレンズのついた機械と、蓋の付いた四角いアルミ缶。菓缶にカップ、お菓子や茶筒。レンズのついた機械はおそらく幻燈機だろう。変わったものはそれくらいで、あとはおばあちゃんの部屋みたいにこぢんまりとしている。

「坊や、宝物を持ってきているだろう。私の宝箱に入れておくれ。交換で舟に乗せてあげよう」

男は四角いアルミの缶の蓋を開け、僕を誘う。

「だめだよ。父さん母さんに叱られる」

それでも男は言ったんだ。

「こんな何もない村では大人も夜はぐっすり寝ているだろう。一体誰に怒られるというんだい。なあに。こんなちっぽけなエンジンもない舟で遠くへ行けるもんかね。舟の上で月光キネマを鑑賞してさ。月見珈琲を飲むんだ。そうして軽く一服したら帰ってこよう」

月光キネマ、月見珈琲。聞いたことも無い魅力的な言葉に僕はすっかりまいてしまいい、ふらふらと舟に乗り込んだ。

暗い海、黒い空、満月だけが白く眩い。

岸から離れ、だいぶ沖にまで来たとき、男はふいに歌い出した。

「ここに見ゆるは月光キネマ。

この妖しきギヤマンの

邪光ランタン輝けば

見える。視えるよ。そのココロ。

奥の暗闇そのまた底の

夢も現も真実も。

歌いながら幻燈機に明かりを灯した男は僕に言った。

「坊や、私の宝箱から何かひとつ、とっておくれよ」

僕はアルミの缶を開け、セロハンにつつ

まれた飴玉をひとつ渡した。

「うふふ。この幻燈機のここ、引き出しが付いているだろう」

確かに幻燈機のレンズ前の普通ならスライドを差し込む部分に、小さな引き出しが付いていた。男は硝子で仕切られたそれを開け、中に飴玉をひとつ放り込んだ。

「邪光ランタン輝けば月に真が映り出す。

男が歌うやいなやレンズから妖しい光が放たれた。そいつは真っ直ぐ月に向かい、白い月がスクリーンとなり、満月に女の子が映し出された。

——月光キネマが始まったのだ。

公園で女の子二人が仲良くままごとをしている。姉妹であろう。

妹の方がポケットから飴を取り出し、食べようとしている。姉さんが水道で手を洗っておいでと言うので、妹は走り出す。そして転んでしまった。飴は砂まみれだ。

姉さんは妹の服に付いた砂を払うと真新しい自分の飴をあげた。

しかしその飴を口にした途端に妹が泣き出してしまった。

どうやら小さな妹には辛い薄荷の飴だったようだ。

「ああ。妹は踏んだり蹴ったりだなあ。あれ？ あの飴、幻燈機の中の飴玉と一緒にだ」

「そうさ。ご明察。この幻燈機はね、お宝に宿る記憶を映せるんだよ。そしてその映像を見るにはこんな真っ白い満月の夜じゃなきゃダメなんだ。どうだい？ なかなか面白いだろう」

「すごい。すごいや！ 他のも見たい！」

「いいだろう。でも先ずは一服しよう。月見珈琲と洒落込もう」

男は器用にプリムス・ストウブで湯を沸かし、アルミのカップに二人分の珈琲をいれてくれた。

「おじさん、砂糖とミルクはありませんか？ でなきゃ僕、苦くて飲めないよ」

「だいじょうぶ。ほうら。こうして珈琲に

満月を映すんだ。そうしてお月さんごと、すうっと一口飲んでみてごらん」

黒い珈琲に映った白い月はとろけるように甘かった。

「わあ。お月さん、バター飴みたいに甘い！」

「珈琲の味も香りもするのにお菓子みたいだろう。これが月見珈琲さ。こうして一杯やりながらキネマを見るのは愉快だね。さあて、お次はどれにする？」

「じゃあ次はこれなんてどう？ だれかの手紙」

男はいいね。いいね。と両手を叩いて喜んだ。

気の弱そうな少年が教室で手紙を書いている。どうやらラブレターのようなのだ。

傍らで敵めしい少年が色々と注文をつけている。この少年の文を代筆しているらしい。

敵めしい少年は更に書き上がった手紙を想い人である美しい少女の下駄箱に入れてこいと命令した。しかし、気の弱そうな少年は少女の下駄箱には入れずその隣の誰とも知らない下駄箱に放り込んで帰ってしまった。

「あはは。ひどいや。おじさん次は？ 次も見たいよ」

「こんなのはどうだい？ 鉄砲型ライター」

男の子がガンマンの真似事をしながら木の葉や枝に火を点けている。小さな火は直ぐに消えたが風にあおられたひとひらの木の葉がある家に舞い落ちた。

その家は燃え、その隣の家も、そのまた隣の家も燃え落ちた。

「——こわい。今度のは怖いね。次は楽しいのが見たいな」

「よしきた。しゃぼん玉の瓶があるよ」

小さな姉弟が留守番をしている。二人は仲良く遊んでいたが程なく弟は眠ってしまった。退屈になった姉さんは家の中でしゃぼん玉遊びを始めた。部屋中にキラキラとした光景が広がり楽しくなって駆け回る。すると寝ている弟につまずいて、しゃぼん液が弟の目にかかってしまった。弟は泣き出すが姉さんは知らぬ顔をして遊び続けた。やがて両親が帰ってくる頃には弟の目は何も見えないく

らいに白く濁っていた――。

なんて怖ろしい映像なんだ。僕は震え、そしてある事に気が付いた。

ライターの子もしゃぼん玉の子も、どちらも知っている子だ。去年、一昨年と神隠しにあつて居なくなつたと大人達が騒いでいた……。

僕は途端に怖くなった。

「おじさん、もうやめよう。浜へ戻ろうよ」

「いやいや折角だ。坊やお宝も見してみよう」

僕のお宝――？ 僕は男に何を渡したっけ？

「おやおや忘れたのかい？ 坊やお宝はコレだよ。コレ」

――水中眼鏡！

「やめてやめて！ それは宝物なんかじゃないったら！」

「うふふ。ダメダメ。やめないよ」

〴〵邪光ランタン輝けば月に真が映り出す。

あの日、あの暑い夏の日――。

僕と親友は学校のプールでは飽き足らずこの海まで泳ぎに出たんだ。夢中になるうちに沖まで来てしまい、泳げども泳げども波の力で押し返されて岸に着かない。

やがて僕らは力尽き、溺れそうになった。

その時、近くを通りかかった舟から浮き輪が投げられた。僕より先にその子が掴みそうになったから、僕は無我夢中でその子の脚を引っ張った。

――置いていかないで！

僕らの立場は逆転し、そうして僕は助かった。

大人達は何も言わないが、僕は親友とそれ以来会えていない。

僕の罪が煌々と月光キネマに映し出された。僕は震えながら男に聞いた。

「僕をどうするつもり？ 警察に連れて行

くの?」

男は言った。そんな事しないよ。人間は子供の罪は罰さない。でも、罪を犯した子は本当は苦しんでいる。坊やだってそうだろう? だから私が助けてあげる。

「ここに見ゆるは月光キネマ。

この妖しきギヤマンの

邪光ランタン輝けば

見える。視えるよ。そのココロ。

奥の暗闇そのまた底の

夢も現も真実も。

この歌はね、秘密を抱えて苦しんでいる子にしか聞こえないんだ。

飴の子、良い子だったから空のお星にしてあげたよ。

手紙の子、カモメになって僕の手紙を届けてくれる。

ライターの子、火のように赤いイソギンチャクになった。

しゃぼん玉の子、目のない深海の醜い魚にしたよ。弟とおそろいさ。

さて……水中眼鏡の子、お前は海亀にしてあげる。

お友達の間もうんと長生きするがいい。

きっと世界が終わるまで、泳ぎ続ける事だろう。

(了)